

「世界らん展 香り審査の復活」

廣瀬清一 事務局

まだまだ暖かい日が続いている。そろそろ冬支度をしようかと思っていたところに、高齢者を対象とした新型コロナワクチンとインフルエンザワクチン接種の案内が区役所から届いた。

例年、冬にかけてどちらも感染者が増加する傾向が見られる。

どうしたものかと暫く思案していたが、新型コロナの流行はかなり収束しつつあるのでインフルエンザワクチンの注射のみで済ました。

新型コロナウイルスの流行は2019年末に突如始まった。2020年2月開催の世界らん展は、ちょうど30周年を迎えていた。幸い緊急事態宣言が出される前で、ぎりぎりのところで東京ドームで開催することができた。

宣言の後は、多くの人の集まるイベントなどは大きな制限を受けた。

こうした制約の中で、世界らん展は会場を東京ドームシティープリズムホールに移して、入場制限などの対策を講じて次年度以降も継続して開催されてきた。

しかし、香りを嗅ごうと花の周りに人が集まり、人と人の距離が近くなってしまう。さらにマスクして香りを嗅ぐことはできない。そのため、残念ながらフレグランス審査(香りの審査)は2021年から実施されなくなってしまった。

ようやく2023年春になり、新型コロナウイルスに関連した規制が緩和され、社会活動は「ウィズコロナ」から「アフターコロナ」になり、少しずつ日常生活が戻ってきた。

こうして2025年になり、ようやく世界らん展(2/5-12)でのフレグランス審査が復活されることになった。

待ちに待った香り審査では、審査員みんな私と同じような緊張感、高揚感そして安堵感とともに、丹精込めた作品の香りを嗅げる幸せを感じた。

蘭の姿だけでなく香りにも関心を持ってほしいとの福原義春氏の思いから、世界らん展に花の香りの審査が導入された。蘭の花はその姿以上に香りはもっとバラエティーに富んでいる。そのため香りの審査は意外に難しい。特に香りは個人的な嗜好が出やすい。客観的な評価ができるようにと、中村祥二氏が中心となり蘭の専門家と香りの専門家が集まり、模擬審査を繰り返して香りの審査方法が定められた。とにかく、香り審査が復活出

来て、亡くなられたお二人も喜んでおられると思う。

いろいろな思いが錯綜するなか、審査は無事終了することができた。



フレグランス特別賞のトロフィー賞3作品とリボン賞の合計10作品は、会場の中心に展示された日本大賞のちょうど後ろの広いスペースが確保され、入場者の皆さんが嗅ぎやすく展示された。

ちなみに、今年のトロフィー賞一位は、春蘭(中国産)“白雲” *Cym. goeringii* (China) “Hakuun”であった。

瑞々しいスズランとジャスミンの香りに爽やかなレモンが加わった、拡散性のある香りがした。

この花は、世界らん展フレグランス審査でこれまでに最優秀賞を3度受賞している。

HP版 VENUS 2018年冬号「花の香り 中国春蘭(中村祥二)」の中で、「東洋の花香の頂点に立つ中国春蘭。香りのよい代表的な銘品には‘白雲’‘冠雪’‘緑雲’などがある。

香りが遠くから自然に広がってくるのは素晴らしい。それもすがすがしく、さわやかで気品がある香りで、東洋蘭の香りに出会うたびに、古来、人が蘭に魅了されつづけてきたことがわかる」とある。

今回、新しい審査員が加わりどんな審査になるのか気をもんだが、実績のある作品が選ばれ少しほっとした。

直に嗅ぐことに勝るものはない。どんなに‘白雲’の香りが素晴らしくても、嗅いだことのない人には言葉では伝えきれない。

世界らん展のように、優れた香りの作品がそろそろ機会をもっと多くの人に楽しんでいただけたらと願う。